

理性主義のシステムとしての資本主義

—理性の特性と資本主義のシステム—

影山 摩子弥

要旨： 資本主義は、理性主義のシステムである。つまり、資本主義は、科学・技術や思考といった理性の成果や機能に依拠しているだけではなく、理性の特性（対象化認識のツール、一般性・普遍性、ヒエラルキー、自律性）を形態的に体现している。それを明らかにして始めて、環境問題、ノーマライゼーションに基づく福祉、知識創造、NPO・ボランティア組織、ネットワーク組織が、新しいシステムを求めるものであることが明らかになる。

〔キーワード： 経済システム、合理主義、理性、社会思想、ネットワーク〕

1 問題の所在

近代思想の父と言われるデカルトがコギトを論じて360年余りになる。その間、我々は、産業革命や情報革命などを経験し、現代においては、往時と比べ、経済は大きな発展を示し、グローバル化が進展するに至っている。

しかも、現代においては、人間生活の質の問題がよりいっそう認識されるに至り、グローバル化する環境問題や資源問題は、大量生産・大量消費・大量廃棄に基づくことによって地球の環境や資源に多大な負担をかける近代的生産や労働、消費のあり方に反省を迫っており、また、ノーマライゼーションを実現しうる福祉を求める声は、それぞれの事情が求める福祉サービスに対応しきれない国家福祉に対して反省を求めている。現代におけるこれらの様相は、近代黎明期との質的相違を醸し出している。

このような現代は、歴史の中でどのように位置づけられるのか、そして現代はどこにいくのか、また、どこにいくべきであるのかは、我々に突きつけられた重要な課題である。

このような問題意識に立った場合、視野に入ってくるのは、ポスト・モダニズムである。し

かし、ポスト・モダニズムの議論は、現代と近代との相違を強調するものの、モダニズムに依拠した消極的名称に現われているように、その相違の歴史的意味を集約する概念を生み出しえていない。一方で、現代がモダニズムとの連続性の局面をもつことを説明しきれておらず、現代を一面的に捉えているとの感拭えない。すなわち、現代は、近代との大きな相違を示しているものの、もの作りは終わったわけではないし、市場や企業といった制度要因は未だに存続している。

したがって、このようなポスト・モダニズムの問題性の背景には、近代と現代を包摂する資本主義の本質論ないし一般論と、現代の特殊性についての議論とが整理されていないことがあると言えるであろう。そこで、適切な整理が必要となるのであるが、その際、システム論的観点が必要となるのである。すなわち、社会は、経済や政治、文化といったサブ・システムを包摂する全体システムである。そこで、「社会の相違」や「時代の相違」は、それまでとは異なる事象が各個別領域（サブ・システム）に生ずるだけではなく、各個別領域に生じているそれぞれの新たな事象が同類ないし相似的であり、さらに、全体システムがそれらの事象を錯乱要因として解消しようとする。

るのではなく、それらを組み込んで再生産的に機能していることをもって規定されることになる。その結果、「時代の変化」は、全体システムとしてのまとまり方の相違をもって認識されることになる。言い換えれば、システムに対象化されている設計理念やシステムの再生産を担う主体の価値観や行動様式に反映されている理念——それを筆者は、システム理念と呼んでいる——の相違をもって認識される事になる。起動因を視野に収めつつ、それをサブ・システム間の関係において図式化したものが、唯物史観の定式であると言うことができよう。

そこで、現代を歴史の中に適切に位置づけるためには、本質論的に資本主義の理念を明らかにするとともに、現代の特殊性が資本主義の本質にいかなる修正を加えているのか、その修正の理念的特性は何かを明らかにすることが肝要である。

その際、近代には、資本主義の理念が先鋭に現われているとすれば、近代資本主義を構成する市場や企業組織、代議制民主主義、近代的官僚制といったシステムの理念的抽象化は、資本主義の本質論ないし一般論的考察となりうる。その意味で、近代の考察は、特殊論としてだけでなく、一般論としても重要である。

では、近代に先鋭に現われている資本主義の本質的理念とは何であろうか？それは「理性主義」と言える。すなわち、デカルトのコギトこそ、資本主義の本質と言える理念を提示し、近代の確立を促すものであった。しかし、資本主義の本質が理性主義であると言う時、それは、単に、資本主義が科学・技術や思考という理性の成果や働きに依拠していることを意味するだけではない。資本主義がそのシステムや観念において、理性の特性を体現している点を忘れてはならない。例えば、市場は、構成員たる主体に合理的思考を求める点で理性主義的であるだけでなく、その形態や存在性において理性の性質をシステムの体現しているのである。そこで、資本主義の本質を明らかにするためには、コギトないし理性を、システムや観念に対象化する特性の側面において、すなわち、システム論的に、整理を行う必要がある。

しかしながら、ウェーバーにしても、フラン

ス現代思想の論者やフランクフルト学派にしても、近代や資本主義の本質として合理主義を語り、資本主義のシステムにおける合理主義的側面ないし理性への依拠が語られることはあっても、合理主義の中核である理性にまで遡及して、資本主義が理性の特性の体現であることを十分解明しえているわけではない。言い換えれば、理性を本質とする合理主義に基づくと、何ゆえ市場や企業、民主制、官僚組織といったシステムが現出するのか、また、効率性や合理性、客観性、一般性などという合理主義の構成要因を成す観念が必然化するのか、という根本的問題が、十分解明されてきたとは言い難い。

そこで、本稿では、資本主義というシステム、したがって、市場や企業、民主制、官僚組織といった資本主義を構成する基本的なサブ・システムに具現し、それを再生産する主体の観念や行動様式に現われる、理性の特性を明らかにすべく、主にデカルトの所論に拠りつつ整理を試みる。

2 理性の認識論的本質

資本主義は、理性によって作り上げられてきたと言っても過言ではない。産業革命や情報革命を生み出し、資本主義をここまで発展させたのは、科学・技術であり、それこそ、まさに理性が生み出したものである。このような理性について、デカルトは、次のように表現している¹⁾。

「最高の善は、信仰の光なしに自然的な理性で考察した場合、真理をその最初の原因から認識する事に他なりません。それは即ち智慧であり、その研究が哲学なのです。」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 14頁)

デカルトの言う哲学は、桂寿一が解説しているように(桂寿一, 1981, 173頁)、我々の言う哲学に加え、自然科学や社会科学、人文科学を包括する体系であり、学問体系全体を包摂する概念と考えてよいが、それは、まさに理性の機能であり、成果である。そして、理性が真理を認識するという機能を果たするためには、事物を認識対象として措定し、考察を加えることになる。

それこそ、認識主体であるわれわれにとって、理性が持つ本質に他ならない。すなわち、理性と

図1



は、物事を客観的对象として措定し、その本質や全体像を把握するためのツール、すなわち、対象化認識のツールと言うことができる。それは、思考が客観的对象物をもたない場合であっても、観念的对象を措定しつつ、考察が展開されることを思えば、理性の本質的機能として規定することができよう。その機能によって理性は、森羅万象に「対象」という資格を付与し、もって対象世界としてまとめ上げることになる。それを図示したのが図1である。

理性は、このような機能をもつことによって、様々な付随的特性をもつことになる。そこで、次節では、システムや主体の行動様式、観念に対象化する理性の特性について見て行くことにしよう。

3 理性の諸特性

3.1 対象との関係構造における特性

対象化認識のツールとしての理性は、それに伴っていかなる特性を持つのであろうか？デカルトは、次のように述べている。

「理性あるいは良識が、私どもを人間たらしめるもの、私どもを動物と区別する唯一のものである限りは、それは、完全にひとりびとりにそなわる。」(Descartes, 落合太郎訳, 1982, 13頁)

つまり、特殊な芸術的感性などとは異なり、

人間である以上は、誰にでも備わるという、一般性・普遍性を、理性は、もつ。

このような一般性・普遍性は、ひるがえって、認識対象となる諸事物に、認識対象という一般性を付与することになる。すなわち、あらゆる事物は、それ固有の性質や特徴をもつ存在である。しかしながら、理性は、それらの事物を、対象という共通の資格に還元するのであり、その意味で、対象を平等なものとして扱い、一般化することになる。それゆえに、理性は、図1に示されているように、固有の性質をもって個別的、自律的に存在する森羅万象を対象世界という単一の世界にまとめ上げることになるのである。デカルトの次の叙述は、理性が諸事物を対象という単一の性格に還元する事を述べていると考えられる。

「天空の物質と地上の物質とは、同一のものであり、かつ多数の世界はありえない……中略……無数の世界があるとしたら、それらは、全く同じ1つの物質から成り立たねばならず、したがって多数ではなくして、ただ1つの世界しかありえない……中略……それゆえに、全宇宙には、ただ1つの同じ物質が存在する。」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 112頁)

さて、認識の入り口において、事物を対象として位置づけた理性は、さらに、認識の遂行過程において、それぞれの対象の中に一般性を見出す。そして、その必然的帰結として、認識の帰結としての対象像や思考の結果としての観念、その具体化としての制作物などにおいて、一般性を求めることになる。例えば、理性は、対象の中に、ある一定の条件で常に生ずる規則性や常定性、すなわち、法則性という一般性を想定し、それを捉えようとする。したがって、認識の帰結としての対象像や制作物においても、法則性に対象化することになる。さらに、事物が変化する場合でも、その変化の法則性や、そもそもすべての事物は変化するという法則性において、捉えようとする。この点について、デカルトは、理性的に設計されていない街を題材に、次のように表現している。

「古い市街は……中略……ひどく不均斉なのが一般的である……中略……(それは)理性を用いる人間の意志ではなく、むしろ偶然である。」

(Descartes, 落合太郎訳, 1982, 22 頁)

また, カントは, 理性が法則に関わるものであることを, 次のように示唆している。

「必然性を含むあらゆる規則の唯一の源泉たる理性は……中略……理性が法則を与えるために要求されることは, 理性が自己自らのみを前提する必要があるということである。」(Kant, 波多野精一・宮本和吉訳, 1976, 35 頁)

また, 認識像に求められる一般性は, 次のような形をとることが指摘されうる。すなわち, 認識像は, 普遍的妥当性, すなわち, どの理性においても受け入れられ, 正当性が認められるという, 客観性や明証性が求められるのである。デカルトは, 『哲学原理』において, 「人間認識の諸原理」と「物質的事物の諸原理」という2つの原理の存在を前提にしつつ議論を展開しているが, その原理に関わって, 『仏訳者への著者の書簡』では, 「それら(最初の原因即ち原理——引用者)が明白で自証的であって, 人間の精神が注意深くその考察に向けられる時には, その真理性を疑い得ないほどである事」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 12 頁)が必要である, としている。したがって, このような客観性や明証性を満たすために求められる数値的表現や画一的整理, 標準化などは, 一般性のあり方の一つと言えよう。

このような, 理性, 対象たる位置付け, 対象内に想定される性質, 認識の帰結に見られる一般性は, 偶然の一致ではない。それらは, 相互に一般性の連関にあることによって, 認識論的枠組みを成立させようのである。

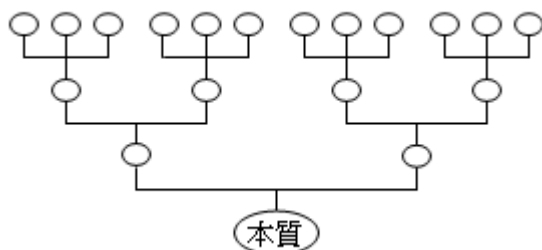
3. 2 認識構築における特性

さて, 既述のように, デカルトは, 理性の役割について「真理をその最初の原因から認識する事」としていた。では, 事物を構成する根本的原因とその他の構成要因との関係は, どのようなになっているのであろうか?

「おのおの実態には, 1 つの主なる性質があって, これがその実態の本性および本質を構成し, 他のすべての属性は, これに帰着せしめられるようになっている。」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 71 頁)

ここで, 「帰着」とは, 「他のすべての属性」が「本質」から論理的に展開すること, すなわち, 演繹性を示していると, 読み取ることができる。すなわち, デカルトによれば, 「私の発見したいくつかの原理は, 実に単純で一般的なものであって, 他, 属性は, これらの原理からいろいろな仕方で演繹せられる」のである (Descartes, 落合太郎訳, 1982, 78 頁)。したがって, 対象を構成する諸要因は, 単一の本質を根源として, 演繹的, 論理必然的因果関係をもって, 体系的まとまりを成すと言うことができる。すなわち, 単一の本質を根源とする樹形図的体系性を成すのである。そして, その図式の上下を入れ替えれば, 本質を頂点としたピラミッド型のヒエラルキーになる。つまり, 理性は, 認識の遂行過程において, 対象の中に樹形図的体系性(ヒエラルキー)を見出すのであり, 認識の帰結として, 対象を樹形図的体系性において再構成することによって, 対象像を描く。図2は, それを図式的に表現したも

図2



のである。

対象の認識的再構成について、デカルトは、次のように表現している。

「すべてのものの原理を、もしくは、第一原因を一般的に見出そう……中略……つぎには、これらの原因から演繹せられそうな最初の、最も正常な結果はいかなるものであるかを調べた。これによって、天空を、もろもろの星を、一つの地球を、すすんでは、その地球上の水、空気、火、もろもろの鉱物を、その他あらゆるもののうちの最も普通で最も単純な、それ故にまた最も知りやすいものを見いだした……中略……次には、より特殊なものへ降りてゆこうとしたとき、種種雑多なものがおびただしく私の前に現われてきたのである。」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 77-78頁)

したがって、哲学が理性の機能であるとすれば、「哲学全体は、1つの樹木のごときもの」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 24頁)となる。つまり、哲学が樹形図の体系性をもつのは、必然である。デカルトは、『哲学原理』の仏訳者への書簡において(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 24頁)、根を形而上学(第1哲学)、幹を自然学(第2哲学)、枝を医学、機械学、道徳とする哲学の体系を描いているが、まさに、哲学の樹形図の体系性を表現するものである。

また、合理性や効率性といった理性主義の中核的概念や発想は、理性が志向する樹形図の体系性の構成要因である論理必然の因果関係に起因する。すなわち、合理性は、言説や事物における論理的連関性の適切さ・正当性に関わる謂いであり、効率性は、目的と手段と言う因果連関において、一定の目的に対してある手段がどれほど適合的であるのかの度合いに関する謂いと言うことができるであろう。

3.3 存在性における特性

さて、理性が森羅万象を対象として措定しつつ認識するツールであると言う時、その対象には、理性自身も包摂されることになる。それは、近代の思想家や哲学者によって、理性による自律性と捉えられてきたのであるが、理性がもつこの自律性こそ、「自由」なる概念の根拠となり、近代のカギとなる発想であった。ヘーゲルが「精

神(理性)の「実体ないし本質は、自由である」(Hegel, 長谷川宏訳, 1997上, 38頁)と言う時、それは、まさにこのことを表現している。ただ、デカルトは、人間の自由の根拠を理性に求める観点をもつものの、理性の原理的考察によってその自律性を析出するという存在論的観点については希薄であり、その精緻な考察は、カントやヘーゲルを待たねばならなかった。そこで、最も体系的で精緻な議論を展開しているヘーゲルから見ていってみよう。

ヘーゲルは、精神(理性)が「内部に中心点を持つ」ことによって「自分の内部で安定している」ことを指摘し(Hegel, 長谷川宏訳, 1997上, 38頁)、それをもって、精神の「自由」を規定する。

では、なにゆえ、「自分の内部で安定している」状態をもって「自由」と規定できるのであるのか?ヘーゲルは、2つの局面から説明を試みている。

まず、ヘーゲルは、「私が何かに従属している」という時、私は、自分でない何かと関係し、外部の何か無しには存在できない状態にあるのであって、自由であるのは、自分のもとにある時」(Hegel, 長谷川宏訳, 1997上, 38-39頁)とし、他者に従属していない状態、つまり、他者に依存せず、自らのもとにある、自らの足で立っている自立性の状態をもって、説明にあてる。

ヘーゲルは、さらに、精神が自分の内部で安定している状態ないし機能について、「自分を意識し、自分の本性を判断し、同時に、自分に向かって自分を生み出し、本来の自分に帰っていく活動を行っている」(Hegel, 長谷川宏訳, 1997上, 39頁)状態ないし機能と説明し、そのような精神の機能をもって、自由を規定する。すなわち、「自由とは、まさに自己を意識し……中略……そのことによって自己を実現するという無限の必然性をうちに含むものです。自由とは、自分自らを目的としてそれを実現するものであり、精神の唯一の目的」(Hegel, 長谷川宏訳, 1997上, 42頁)としている。すなわち、自由とは、自己意識の状態であり、言わば、自己対象化に基づいて自己を規制する、ないし、規律する、自己規律性の状態である。

つまり、ヘーゲルの「自由」は、自立性と自

己規律性の両側面から成っているものであり、その両側面を包摂する概念こそ、自律性と位置づけることができる。ヘーゲルのこのような観点は、既にカントにおいて見られる論点である。

カントは、『実践理性批判』において、実践理性や意志、道徳的法則との連関を明らかにする。その際、カントは、「自由」について次のように述べている。

「意志の自律はあらゆる道徳法則ならびにこれに遵う義務の唯一の源泉である。……中略……すなわち法則のあらゆる実質（すなわち欲求された対象）から独立であること、およびそれと同時に、格率がもたなければならない純粋な普遍的立法形式によって意志が規定されるところに、道徳性の唯一の原理が成立するのである。しかしこの独立性は、消極的意味における自由であるが、後の純粋な実践的理性の自己立法は積極的意味における自由である。したがって、道徳法則の表現するものは、純粋な実践的理性の自律、言い換えれば、自由にはかならない。」（Kant, 波多野精一・宮本和吉訳, 1976, 54 頁）

このことから「自由の概念をば理性の規制原理とする」（Kant, 波多野精一・宮本和吉訳 1976, 76 頁）ことが可能となる。ここで留意すべきは、カントが自由を消極的自由と積極的自由とに分けていることであり、カントにとって、単なる「独立性」は、消極的自由に過ぎず、理性の「自己立法」こそ、すなわち自己規律性こそ、積極的

自由である点である。この論点は、ニュアンスの違いはあるものの、先のヘーゲルへの連繋を思わせるものである。ヘーゲルの自己意識についても敢えて単純化を図り、カントやヘーゲルが論ずる理性の自己規律的特性を図示したのが図 3 である。

さて、人間が理性をもつ存在であるならば、人間は、理性の自立性・自己規律性すなわち自律性という自由によって、その存在を規定されるはずである。すなわち、人間は、理性の自律性に基づいて、自らが持つ理性によって判断し、自らを規制しつつ行動する存在であり、自由な存在ということになる。そして、近代の思想においては、そのような構図に基づいた自由論が展開され、自由な主体たる個人という人間の位置付け（近代的人間像）が登場し、自由を実現する社会が目指されることになる。

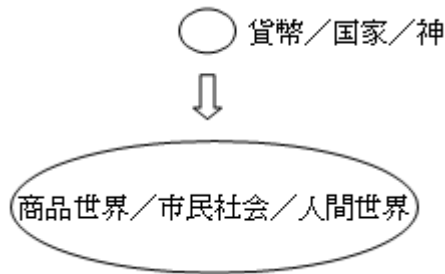
すなわち、デカルトは、「意志の自由は自明なことである」（Descartes, 桂寿一訳, 1981, 61 頁）とし、「人間が意志によってすなわち自由に行為し、かようにしてある特別の意味では、自分の行為の創造者であり、また、この行為によって称賛に値することこそ、人間における最高の完全性なのである」（Descartes, 桂寿一訳, 1981, 59 頁）とすることによって、人間の自由の根拠を意志に求める。ここで「意志」とは、思惟の形態の 1 つである²⁾。「意志」が人間の自由の根拠であり、「意志」が思惟という理性の働きの 1 つであるならば、自由の根拠は、理性にあるということになる。したがって、デカルトの所論にしたがえば、人間が、自分の意志（理性の働き）に基づいて、自らの行為を生み出すべく何らかの行為を自律的に図っていくことこそが自由ということになる。

「人間すべてに備わる」理性を根拠とする自由論は、人間にとって自由が本質的、普遍的であることを示すことによって、封建的身分制を脱し、新たな社会を構築しようとする啓蒙主義の理論的基礎を成す。ルソーやロックは、カントやヘーゲル、デカルトにおけるほど精緻ではないものの、自由の原理的根拠を理性の自律性に求めつつ、人間の自由を語り、それを実現する社会システムを構想するのである。

図 3



図4



4 理性と資本主義

4.1 理性の特性と資本主義のシステム

以上、十分な資料を用いて議論を展開できているわけではないが、理性の基本的諸特性を見てきた。そこでは、資本主義において重要な意味を持つ一般性や合理性、効率性、客観的明証性、数値的表現、標準化などが、理性の諸特性から派生してくるものである事が示された。

さらに、理性の本質や諸特性を図式的に表現すると(図1～3)、その図式的形態が、資本主義の経済領域や政治領域における基本的なシステムである市場や企業、民主制、官僚組織を想起させるものであることが分かる。

すなわち、理性の本質において析出した「対象世界と理性との関係図式」は、経済システムに関して言えば、『資本論』第1章「商品」において明らかにされているような、貨幣とそれによって取りまとめられる商品世界との関係と相同的であるし、政治システムとの関わりで言えば、市民社会と国家との関係の図式と同様である(図4参照)。

また、理性が志向する樹形図的体系性、すなわち、ヒエラルキーは、一般的な企業組織や官僚組織を想起させるものである。さらに、理性の自律性ないし自由は、市場を構成する経済主体が保持する特性であり、資本主義を構成する市民が持つ権利である。

これらは、偶然の相同性や恣意的な類推ではない。すなわち、憶断ではあるが、われわれ人間は、正当なもの、適切なもの、当り前のものとして接する事象のイメージを取り込み、何かを生み出す際に、そのイメージを対象化させる存在である、とすることができると思われる。したがって、システムを構築する際や再編する際には、人々は、単にシステムの根幹を成すシステム理念に沿った行動様式や制度を生み出すだけではなく、システム理念に起因するイメージを対象化しつつ当該システムを生み出すということである。

この点に関して言えば、ウェーバーは、近代的官僚組織を合理的なものと捉えることによって、それが、理性主義的システムであることを明らかにしている。しかしながら、上述のような、理性の特性とのシステムの相同性にまで議論を深めることができておらず、その意味で、表層的であると言えよう。それゆえに、ウェーバーの立論は、官僚組織の非効率性を指摘する反論との対立地平に埋もれることにならざるをえないのである。

さらに誤解を恐れずに付言すれば、図4に示したように、キリスト教における神と人間との関係を図式化すると、図1との相同性を指摘する事ができる。これに加えて、ローマ・カトリックの普遍主義は、理性主義が志向する一般性・普遍性と重なってくるし、聖職位階制は、まさにヒエラルキーである。また、宗教改革における免罪符批判においてなされた、信仰を各人の良心に求める観点は、個人を析出することになり、個の自律性や自由につながる観点と言える。カトリシズムやプロテスタンティズムという派閥の相違を反映して、それぞれの特異性において表現されているものの、一般論的に言えば、キリスト教の特性は、システム論的に、理性主義の観点を体現するものと言えるのである。それは、間接的ではあれ、キリスト教のパラダイムが近代の準備に一定の貢献をしていることを示すと解釈できる。

この点でも、プロテスタンティズムの教義が資本主義的行動様式や価値観につながるものであることに注目するものの、単にその言説的教義内容のみをもって資本主義との連繫を語る

ウェーバーは、表層的であると言わざるを得ない。すなわち、中世社会において体制内化したローマ・カトリック教会を批判して、本来の教義に向き合おうとしたルターの観点は、言説的内容において近代を用意するイデオロギー的基盤を成すだけではなく、システム・イメージの形成に寄与するという点で、システム論的意味をもっていたのである。

4. 2 現代社会と理性主義

理性と資本主義のシステム論的關係が明らかになった今、現代を特徴づけ、近代との質的様相を醸し出している事象のシステム論的意味が見えてくる。

近年、企業の競争力を生み出す戦略として、知識創造が注目されている。そこでは、明示化・客観化できる知識、すなわち形式知ではなく、客観化しにくい暗黙知が重視されている。暗黙知は、徒弟制度の中で伝えられてきたような経験知であり、したがって、言葉に落したり、マニュアル化したりすることが難しい知識であり、伝達には、共感や感受性といった感性の作動が不可欠となる。そういった知識を形式知化したり、組織において共有化したりすることが課題となっているのである。

また、変化が激しい市場に迅速かつ適切に対応するために、末端の従業員の自律性を重視し、中間管理職を排除したネットワーク型の組織をとる企業の存在は、珍しいものではなくなった。感性に深く関わる需要を迅速かつ的確に捉えるには、感性をもって対応する必要がある、そのために、顧客と直接接する従業員の自律性を重視する必要があるのである。

さらに、紋切り型になりがちな国家福祉に対して、ノーマライゼーションに基づいて各人の事情や思い入れ、気持ちといった感性の領域に十分配慮する福祉が求められてきている。そのような福祉のためには、福祉ワーカーの感性の作動が不可欠であり、それを可能にするネットワーク型の組織が必要とされる。近年、ボランティアやNPOが果す役割に期待が寄せられているが、それは、安上がりの福祉を期待する行政的観点から成されているだけではなく、それらが本質的に人々の生活に配慮する目をもち、

ネットワーク型の組織を志向する点に注目する観点からも成されているのである。

企業やボランティア組織におけるネットワーク型の組織は、従来のヒエラルキーとは異なるフラットな組織をもつ。しかも、その契機は「感性」への注目にある。ここに、理性主義としての資本主義へのアンチテーゼの側面が見受けられる。

ただ、一部のベンチャー企業やボランティア組織を除いて、ネットワーク型の組織とは言っても、完全なネットワークを形成しているわけではない。また、企業においてもボランティア組織においても、感性だけで成り立つシステムが志向されているわけではない。客観化・一般化が難しく、感性の作動を不可欠とする暗黙知が重要性をもつとは言っても、その形式知化が課題になることによって、企業は、感性と理性のシステムであることが求められている。

他方、医療や老人福祉、保育、教育など、人により直接に向き合わねばならない領域においても、よりよいサービスの提供のために、効率性や合理性は無視できない。しかしながら、収益性のために過度に効率が追求されることによって、病人のたらい回しや医療事故、老人や乳幼児への虐待、教育の荒廃が生じていることは、周知のことである。

すなわち、理性と感性から成る人間³⁾に向き合うシステムは、そもそも合理主義一辺倒にはそぐわず、理性と感性の融合システムでなければならないはずである。つまり、それは、感性と理性の両契機を、本稿で論じてきたような意味で体現するシステムであり、理性中心主義でもなければ、徒弟制度や自然に翻弄される農業など、経験知が重きをもつ領域が支配的であることから感性の作動が基軸とならざるを得なかった共同体システムとも対峙するものである。

その意味では、現代において注目されてきているシステムや契機は、萌芽的で、部分的であるものの、新たなシステムの意味合いをもつものであり、その点では、わが国でも見られたような、近代への対峙を主張しつつ前近代への回帰を示す観点や、ポスト・モダニズムのように、近代と対峙する側面にのみ注目する観点の一面性を見て取ることができよう。

本節においては、本稿の課題を越えてしまったが、本論の意義を整理するために、理性と資本主義との関わりおよび現代との関わりをシステム論的に整理した。しかし、その内容は、憶断に満ちており、それぞれ主題的に論証せねばならない重要性をもつ。これらについては、稿を改めてそれぞれに論ずることとしたい。

(横浜市立大学商学部)

注

- 1) 『方法序説』では、「私の理性を開発するために、私が私に命じた方法にしたがって力の限り真理の認識へと前進するために」(Descartes, 落合太郎訳, 1982, 38-39 頁)とも表現している。
- 2) 「われわれのうちには、ただ2つの思惟の形態、すなわち知性の認識と意志の働きしかない。」(Descartes, 桂寿一訳, 1981, 57 頁)
- 3) 本稿では、本稿の主題からして重大な支障はないと考えたため、無意識の領域や、理性と感性と言われる機能についての精神分析的整理・考察を捨象した。

参考文献

桂寿一(1981)「解説」デカルト『哲学原理』岩波書店。

Descartes, René (1637) *Discours de la Méthode & Essais*, Euvres de Descartes Publiées par Charles Adam & Paul Tannery, sous les Auspices du Ministère de L'instruction Publique, 12vol., Léopold Cerf, Imprimerie-Éditeur, 1896-1910. (落合太郎訳(1982)『方法序説』岩波書店)

Descartes, René (1644) *Lettre de L'auteur à celui qui a Traduit le Livre, Laquelle peut ici servir de Préface*, Euvres de Descartes Publiées par Charles Adam & Paul Tannery, sous les Auspices du Ministère de L'instruction Publique, 12vol., Léopold Cerf, Imprimerie-Éditeur, 1896-1910. (桂寿一訳(1981)『哲学原理』岩波書店)

Descartes, René (1644) *Principorum Philosophiae pars prima & pars secunda*, Euvres de Descartes Publiées par Charles Adam & Paul Tannery, sous

les Auspices du Ministère de L'instruction Publique, 12vol., Léopold Cerf, Imprimerie-Éditeur, 1896-1910. (桂寿一訳(1981)『哲学原理』岩波書店)

Hegel, G.W.F. (1840) *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Georg Wilhelm Friedrich Hegel Werke in 20 Bänden Bd.12, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1970. (長谷川宏訳(1997)『歴史哲学 上下』岩波書店)

Kant, Immanuel (1788) *Kritik der Praktischen Vernunft*, Immanuel Kants Werke : in Gemeinschaft mit Hermann Cohen, Artur Buchenau, Otto Buek.... / hrsg. von Ernst Cassirer Bd. 5//b, Verlegt bei Bruno Cassirer, Berlin, 1922. (波多野精一・宮本和吉訳(1976)『実践理性批判』岩波書店。)